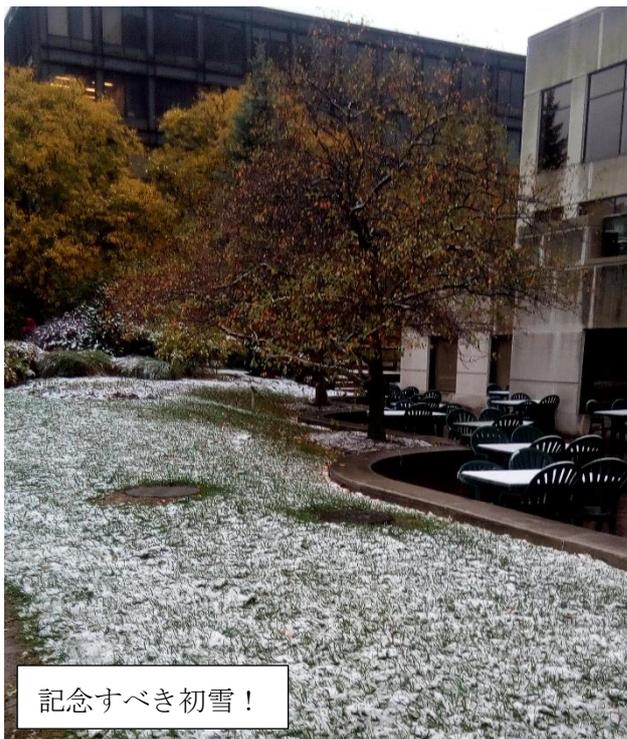
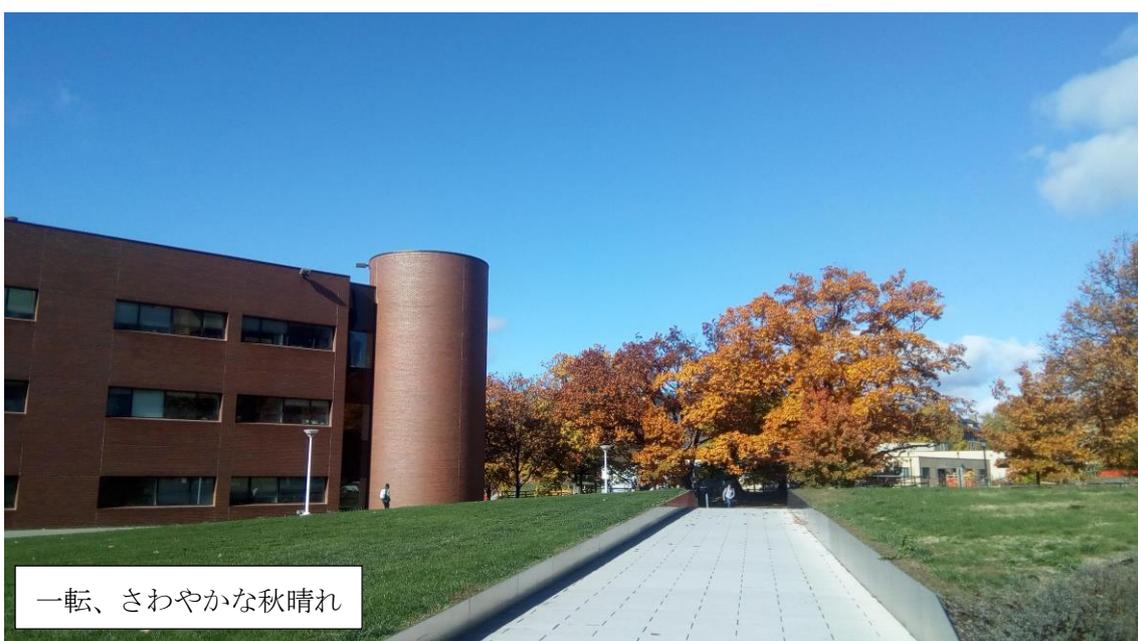


こんにちは、CornellでPhD 1年目の鄭麗嘉です。丘の上にあるIthacaは噂に違わず寒く、10月末の時点ですでに雪が降りました。急にがくんと冷え込んだので一時はどうなることかと思われましたが、その後は少し気温が上がり、今は小康状態を見せています。それでも日本と比べるとかなり寒いですが、暑さが苦手な自分としては、何だかんだこの寒さを楽しんでいます（氷点下20°Cが迫ってもまだ同じことが言えるか疑問ですが）。10月上旬は研究室決めの時期でどこに入るか悩んでおり、そのストレスもあってひどいホームシックに陥っていたものの、先日無事に研究室を決め、今はまた心機一転楽しくやっています。



記念すべき初雪！



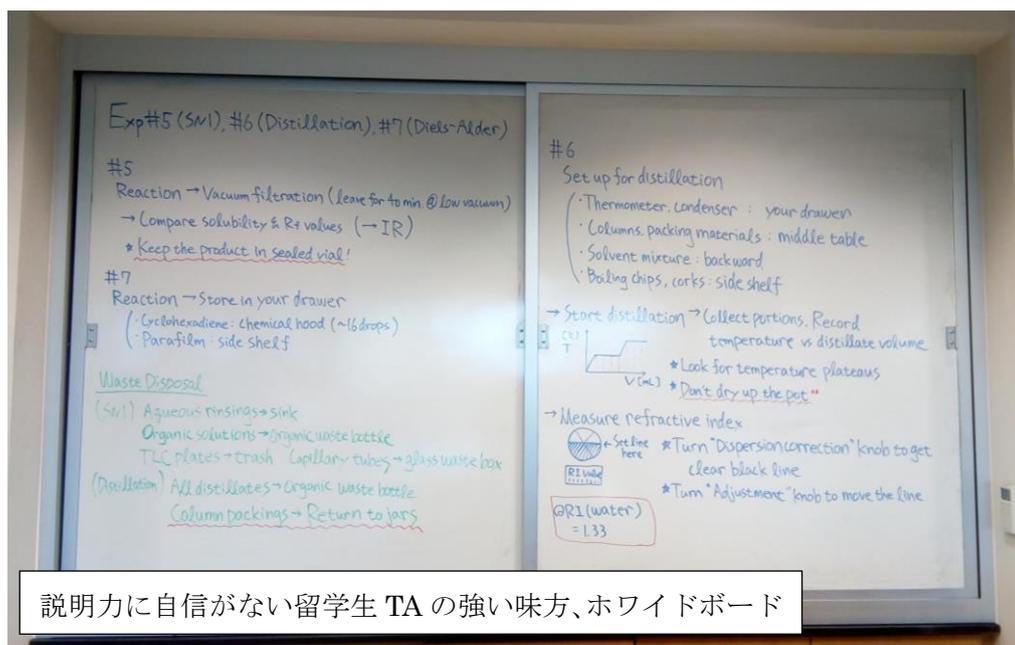
一転、さわやかな秋晴れ

決めた研究室は、Jeremy Baskin という、まだ 2 年目の Assistant professor の研究室です。当たれば得るものは大きいリスクも大きい新しいラボなので、すでに業績の出ている先生との間で悩みました。「研究テーマはどうせやっているうちに好きになるから、ラボの雰囲気とかアドバイザーで決めた方がいいよ」という先輩からの助言も踏まえ、何度も Jeremy と話した結果、彼の考えるラボの運営方針や学生の教育方針に共感し、自分のアドバイザーとして信頼できる人だと思ったので、このラボに決めました。私を取り掛かるプロジェクトは、Jeremy が最も期待をかけているプロジェクトの一つで、ものすごく頻繁に先生とのミーティングが入ります。締め切りがないとなかなか動かない私の性質を知ってか知らずか、3 時間にわたるスタートアップの MTG をした次の日にフォローアップと称して 1 時間話し合い、その 2 日後にまた 2 時間のディスカッション、というふうにがんがん推してきます。まだプロジェクトの本当に初期段階で文献調査が主なので、話し合いが多いのはまあ頷けるのですが、ただでさえ授業と TA がキャパを圧迫しているので、毎回準備するのは結構忙しいです。それでも、先生が話し合いのたびに新しいネタを持ってくるものだから、こちらとしても何か仕入れようと、空いた時間を見つけてせっせと論文を読んでいます。モチベーションの浮き沈みの激しいことが自分の難点だったので、このプッシュ感こそ Assistant professor の醍醐味という感じで、なかなか楽しいです。

先ほど少し触れたように、私がいる Cornell の化学科では、1 年目は授業と TA がメインとなります。6 つの授業と 2 学期間の TA が PhD の取得要件なので、それをさっさと満たして 2 年目以降は研究に専念しようという学科戦略です (TA に関しては、外部の奨学金を取れなければ 2 年目もすることになります)。私はそれに加え、留学生用の英語の授業も課せられているので、今学期は 4 つの授業と TA をやっています。

	月	火	水	木	金
9:00	有機化学	化学生物学	有機化学	化学生物学	有機化学
10:00					
11:00		英会話		英会話	
12:00	生物物理化学		生物物理化学		生物物理化学
1:00					
2:00					
3:00		TA (オフィス アワー)	TA (有機実験)	TA (有機実験)	
4:00					
5:00					

ここでの TA は自分の知っていたものと少し違っていて、実質的には集団指導の塾の先生に近いです。16人×2クラスの授業を任されて、生徒たちに実験の指導をします。1週間に1度の TA ミーティングで教授と会い、大まかな実験内容の説明や注意を受けますが、自分の学生にどのように教えるかは完全自主性です。基本的には、授業の最初に5分程度のミニレクチャーをして、あとは実験する生徒の周りをうろついて質問に答えていく感じです。息つく暇もなく質問がくるので、正直 TA の時間が一番英語の練習になっています。



授業中だけでなく、実験レポートの採点においても個々の TA の裁量が大きいので、個々の生徒に細かくフィードバックをしていくと本当に終わりがありません。生徒たちも高い GPA を取って良い大学院に行こうと必死で、しかしこっちは授業や研究との兼ね合いがあるので、いかに効率良く、かつ十分なフィードバックを生徒に与えられるかを考える必要があります。「全部に A の力を注いでいては PhD を取れない、優先順位をつけて、それぞれに A か B か C、どれだけの力を注ぐかが大切だ」というのは、PhD の学生によく言われるアドバイスですが、このバランス能力は社会に出たり自分のラボを持ったりした際にいよいよ重要になるはずで、PhD はまさに絶好の訓練期間だと思います。

ここに来たばかりの時は、英語で授業なんて想像しただけで胃が痛くなったものですが、生徒数が少ないこともあり、やってみると案外何とかなっています。英語に関しては、アメリカの空気を吸っているだけでめきめき上達するはずもなく、「発音は訛っているけど意味は伝わる」といろんな人に言われつつも、まあ方言みたいなもんだなと開き直ってやっています。文献調査・授業・英語強化と、全てにおいてまだ研究のための土台を作っている段階ですが、やっていることが自分の身になっていると感じます。このような成長の機会を支援してくださった船井情報科学財団に、最後になりましたが厚くお礼を申し上げます。